

北米インディアンの生活 (8)

—23部族の伝承と習慣—

エルシー・クルーズ・パーソンズ編著
神 徳 昭 甫 訳

VI メキシコの部族

VI-4 トルテカ族¹の建築技師—チチェン・イツァ帝国の興亡²

戦いは終わった。かつて栄光を誇ったチチェン・イツァ帝国³は陥落した。すべては一人の女性の愛情をめぐる、男同士の争いのためだった。征服者マヤパン⁴の国王、フナク・ケエル⁵

-
- 1 トルテカ族 the Toltecs. 「メキシコ中央高原ではテオティワカン文化（前1世紀—後7世紀）が衰退した後、ナワ族に属するトルテカ民族が10世紀に支配権を獲得し、トゥーラ（メキシコの北北西約70キロ）に都を定め、征服と納税を基盤にした王国を築いた。テオティワカンの工芸・技術を継承する一方、軍事力優位の時代を反映した建造物や石彫を生み出し、建物の壁画にはジャガー、ワシなどの浮彫が残されている。16世紀に集められた伝説からトルテカ王国の正確な歴史を再現するのは困難だが、領内の様々な民族間の紛争、北方からの野蛮人（チチメカ族）の侵入、人口増大と食料不足、ケツァルコアトル（羽毛の蛇）とテスカトリポカ（闇の神）をそれぞれ信奉する二派の争いなどの要因により、12世紀後半に滅亡するに至った。トルテカ王家の末裔は、メキシコ盆地内の湖南岸にあるクルワカンの町に移り住み、「トルテカ」という言葉は、その後「優れた技術者」、「高貴な人」を意味するようになった。考古学的な調査と伝承から明らかにされたが、10世紀後半にトルテカ族の一部（もしくは、トルテカ族の影響を強く受けたタバスコ地方に住んでいたマヤ系のプトゥン人）が東方のマヤ地域に侵入している。ことにチチェン・イツァには、トルテカの都トゥーラの建造物、石彫と酷似する要素が多数見られ、またククルカン（マヤ語で「羽毛の蛇」を意味する）信仰も始まり、ユカタン半島では10世紀にトルテカ=マヤ文化は形成された」（小池539）。
 - 2 原題は The Toltec Architect of Chichen Itza
 - 3 チチェン・イツァ Chichen Itza. 中米のユカタン半島南部の都市。マヤ文化の遺跡で有名。「チチェン」は「井戸のほとり」、「イツァ」は「水の魔術師」を意味するマヤ語。その名が示すように、天然の井戸「セノーテ」を中心に、この町は展開した。遺跡は3キロメートル×2キロメートルの広域にわたり、先古典期からの文化層も見つかっているが、6世紀ころからプーク様式という、モザイク彫刻で建物の上半分を装飾する建築様式による建造複合体がいくつか建設され、町は栄え始める。しかし、10世紀に「羽毛のある蛇の神」ククルカンを掲げる征服者を迎え、前代のプーク様式に、ショカルコやエル・タヒン（トトナカ文化）の様式の混じった「ユカタン様式」が生み出される。「球技場」や「戦士の神殿」などの新しい様式をもった建物は、基準線をテオティワカンと同じ方角に定めて建てられた。1000年ころ、チチェン、ウシュマル、マヤパンの三都市同盟が結ばれるが、1200年ころ、マヤパンに滅ぼされ、チチェンの人々は散り、町は放棄された（大井67）。
 - 4 マヤパン Mayapan. 13世紀後半、上記ククルカンに率いられたイツァ族が築き上げた王国の一つ。ユカタン半島西寄りの中央部に位置する4キロ四方に及ぶ強大な遺跡で有名。
 - 5 フナク・ケエル Hunac-eel. イツァ族の出と見られるが、マヤパンの首長（国王）となった伝説上の人物。「マヤ神話」によれば、マヤパンとチチェン・イツァの対立が次第に激しくなったころ、彼は自らいけにえとなってチチェンの「聖なる泉」に身を躍らせ、しかも水底で直接受けたという神のお告げをもって生還し、そのためますます名声をほしいままにしたという常人ならざる人物であった（ル・クレジオ47-8）。

は、自ら破壊し尽くした敵国に進軍した。しかし崩壊を免れた僅かな建物にも民衆の姿は見え、歓呼の叫びもまた聞こえなかった。前帝国の市民の多くは殺されたし、捕虜となったものも、後には奴隷にされた。さらに多くのものは遙か南方へ逃げ、ペテン・イツァ湖⁶のほとりに安住の地を求めたのである。

チチェン・イツァの国王、チャック・シブ・チャック⁷は、花嫁のために奮戦したが、結局破れた。この女性もまた高貴の生れであった。友人の妻と知りつづめた、今や消滅を迎えようとしているのだが、200年も続いた有名なマヤパン同盟⁸のこの同盟者を裏切ってまで、フナク・ケエルは彼女を手に入れようとしたのである。

チャック・シブ・チャックとティビルの婚礼の儀は、マヤ族王家の慣例に従い、壮麗かつ絢爛と繰り広げられ、数々の競技や踊り、宴、歌などが続いていた。マヤパン、ウシュマル、イツァマル、さらに他のユカタン半島の国王らが参列して、チチェンは祭り一色に浮き立っていた。ところが、今まさに祝宴たけなわのこのとき、突如何の警告もなく、マヤパンを出たフナク・ケエルとその部下が、この王宮の広い、急峻な階段を駆け上り、チャック・シブ・チャックとその花嫁の部屋に押し入って来たのだ。祝宴で酔いしれていた部下たちは、ほとんど何も抵抗できなかった。フナク・ケエルは嫌がる花嫁の手を引いて自国マヤパンに連れ帰った。

こうして長い戦争が続き、国土はすっかり荒れ果てた。チャック・シブ・チャックはシウ⁹を除く近隣の王国のすべてに向かって援助を要請した。シウのみ中立の立場を守ったからだ。一方、フナク・ケエルは、多くの隣国が叛旗を翻したのを知るや、そのときたまたまタバスコ¹⁰に滞在していたメキシコの戦士団¹¹に助勢を求めた。この結果、激戦は十数年に及んだのである。しかしイツァマルが征服されてしまうと、かつて栄えた名だたる都市が、まるで堰を切ったように次々とフナク・ケエル軍と外国人傭兵との連合軍に侵略されてあつけなく陥落した。最後にチチェンが攻撃されて、チャック・シブ・チャックが殺された。こうしてメキシコ軍の新

6 ペテン・イツァ Peten Itza. 「チチェンを追われたイツァ族は再び密林の放浪者となった。そして自分たちの祖先が来た道を逆にたどってユカタン半島を南下し、ペテン・イツァの湖にたどりつく。湖には小さな島があった。彼らはそこに安住の地を見出しタヤサルという新しい都を築いた」(ル・クレジオ254)。

7 チャック・シブ・チャック Chack-xib-chac. 伝説によれば、チチェン・イツァの首長のチャク・シブ・チャックは、マヤパンの首長フナク・ケエルの陰謀にかかって、イサマルの首長アー・ウーリルとその花嫁の饗宴の席を襲い、花嫁誘拐の挙に出た。このためメキシコ傭兵の助力を借りたマヤパンの軍勢はチチェン・イツァを攻撃した、という(ル・クレジオ214-5)。

8 マヤパン同盟 League of Mayapan 本注2) 参照。

9 シウ Xius. メキシコ出身の王族。マヤパンに滅ぼされて都市同盟は形だけになっていたが、ウシュマルの首長、シウ家の一員であるアー・シャパンは、廃虚と化したウシュマル郊外に居を構え、マヤパン内に人質として幽閉されていたマヤ系遺族を煽動して場内に暴動を起こさせた。こうしてかつての栄光の都、マヤパンは破壊され、遺棄された(ル・クレジオ254)。

10 タバスコ Tabasco. メキシコ湾のカンペシェ・ベイ (Bay of Campeche) に面するメキシコの一州。

11 メキシコ戦士団 a body of Mexican warriors. タバスコ州のカヌル族(「守護者」の意)であると言われる。新兵器の弓をマヤにもたらした(ル・クレジオ253)。

兵器によって首都は壊滅し、放火と略奪の限りが展開されたのである。そして今、征服者は意気揚々と勝利の入城を行うところであった。このころ、ようやく成人に達した彼の息子——それはティビルの息子でもあった——が同行していた。このフナク・ケエルの軍勢には、パンテミットルというメキシコ人の青年もまた参加していたが、彼は戦士としての訓練をこれまで受けてきたにもかかわらず、本来性格的にもっと平和な仕事に向いていた。というのは、この若者は故郷、テオティワカン¹²の巨大な太陽の寺院¹³の建立に僅かながらも力を貸したことから、フナク・ケエルもまた、この若者の職人としての腕、また建築士としての才能を認めており、来るべき、さらに偉大で華麗なチチェン王国再建の青写真を実行に移すためには是非とも必要と考えた人物だったのだ。

フナク・ケエルは息子タシュカルを後に残して、まもなく自国マヤパンに戻った。そして総督を置いておいてこの都市の統治に当たらせた。

タシュカルとこの若い建築士パンテミットルは、たちまち意気投合し、無二の親友となった。パンテミットルは、高いピラミッドの上の四面に回廊を巡らした壮麗な神殿¹⁴の建築に従事した。彼はこのユカタン半島に未知の新しい意匠や技術を故郷のトルテカより、もたらしたのである。例えば、神殿の入口と巨大な石造りの回廊の一部に、羽毛のある蛇の彫刻を施した。これを見たチチェンの人々は、この国にいま花開こうとしている外国の技術に目を瞠る思いだった。

住民の多くは、纂奪者のために奴隷として仕えていたのだが、そのなかには翡翠細工に従事する一人の職人がいた。その端麗な彫り物が彼に名声をもたらした。その腕にかけては、国中の誰も及ばぬ、比類のない名人芸の持ち主だったからだ。二十日ごとにやってくる祭礼で、マヤ族の神々を象徴する王侯貴族のきらびやかな衣装を飾って頭部や胸部、さらにその宝珠に象眼を施すようにとの要請を受けたのもこの人物だった。この老職人は、街外れの萱葺きの小屋に娘と二人きりで暮らしていた。小柄な美しい娘で、彫りの深いその端正な顔に二つの褐色の瞳がきらめいていた。彼女の容姿や身のこなしには、なんとも言えない、ある洗練された雰囲気漂っていたが、これは今日でもマヤの女性に（特にまだ若い間には）共通して見受けられ

12 テオティワカン Teotihuacan. 本注1)、3) 参照。

13 太陽の寺院 the [great] Temple of the Sun. 通常「太陽のピラミッド」と呼ばれ、「テオティワカンで最も目を引く建造物である。土台の両側面の幅は225メートル、高さは頂上にかつてあったはずの神殿をふくめば75メートルに達する。かつてはしっくいでも赤く塗られていたピラミッドの正面は、夏至の日に太陽が没する方位を正確に向いている。このことは太陽信仰がこの民族にとって非常に重要であったという仮説を裏づける」(吉村78-9)。

14 高いピラミッドの上の四面に回廊を巡らした壮麗な神殿 a wonderful temple, erected on a high pyramid. チチェン・イツァの「戦士の神殿」と呼ばれている遺跡。トルテカ文化とマヤ文化の融合した様式を示す建物として知られる。本注3) 参照。

る特徴である。ニクテ、その名が花を意味する¹⁵この娘は父に従順でトウモロコシを挽いていないときには、石の道具を研ぎ、父親の翡翠細工に必要な葦を刈り集めた。他の多くの女性のように、娘もまた神殿でたびたび行われる、大事な宗教的な式典にはほとんど参加しなかった。それにまたこの頃、この父親は普段以上に娘を外に出したがらなかった。それは、フナク・ケエルの軍隊に混じって、この都市に駐屯しているトルテカ人の持ち込んだ新参の神々のための犠牲として、娘に白羽の矢が当たるのを極力避けようとしていたからである。しかしながら、神殿を飾る、あの羽毛の蛇の像に翡翠と黒耀石の目を入れてもらうため、この父親の元を訪れたパンテミットルは、彼女の美しさにたちまち心を奪われてしまった。

パンテミットルは、メキシコの宗教生活の一部にも相当する、トラチトリの試合ができる、大球技場¹⁶をチチェン・イツァに造ろうとし、完成間近に漕ぎ着けていた。チチェンの人々は、派手な見せ物が好きだったので、この競技が彼らの都市に導入されることを素直に喜んでいて。その球技場の構造は、二本の巨大な石の壁を平行に並べたもので、両方の壁の頂上あたり、さらに中央部からは羽のある蛇を彫った石の環が突き出ている。しかし競技場自体は、施設全体のごく僅かな、その一部分に過ぎなかった。両端には、美しい神殿が配置されていたし、ことにその壁の一面は、最上部と端が、ここの建造物全体で最も華麗な箇所になっていた。外側は虎と盾を交互に配した装飾帯^{フリーズ}であった。建物の柱廊は二匹の蛇が支える。その中間は石でできた祭壇と、上に向けた両の掌でこの祭壇を支える十五体の色彩を施された人間の像が置かれた。出入りの扉のだき石には戦士の姿が、また木彫りのまぐさには太陽神の像が彫り込まれた。神殿の内部にはフナク・ケエルの部隊とその敵軍の戦闘場面が描かれた。若者は、このフレスコ画に多くの家庭的な光景をも取り入れたが、大胆にも女人の像、さらにはあのニクテの像まで描き込んでしまった。が、しかし女は父祖伝来の宗教に何の役割も果たしていないので、神々を祀る神殿の中に飾ってはならない、と信じるタシュカルにすれば、これは冒瀆にほかならなかった。

ところで、このタシュカル自身もニクテを見て、なんとか自分のものにしたいと思った。かくしてパンテミットルに対する彼の友情は、いまや激しい敵意と競争心に変わっていた。二人の争いは、やがてチチェンの総督の耳にも届いたが、競技場完成を前にして、大きな障害とな

15 ニクテ、その名が花を意味する Nichte, the Flower. ニクテとは、「五月の花」の意のマヤ語である（ル・クレジオ115）。

16 大球技場 a wonderful Ball Court. 「チチェンのみではなく、中央アメリカ中に散在して発見されている。...球技は、直径1フィートの重いゴムボールを巧みに操る、技術を要する危険な競技だ。競技者は、すねや腕、最も痛烈な打撃を受ける身体の部分に防具を着け、えり肩のヨークの下は掛け布で覆う。両サイド四対一で、ボールに手を触れないでコントロールし目印や環に向け、ボールを動かして競い合う。目標はボールを蹴って環を通り抜けさせることである。環を狙ってボールを蹴るのは極めて難しかった。伝説的な競技者ですら、成功したのは生涯に数度しかなかったと言われる。敗者は生贄となり、心臓が太陽神に捧げられた。ときには切断された首が競技に用いられることもあった」（グロフ78）。

りかねない、この問題に彼はすっかり頭を抱えてしまったのである。総督の立場は厄介であった。国王の怒りを招くのは怖い。さりとてタシュカル¹⁷の側に立つのはためられる。トルテカ人ではあるが、帝国再興の大役を担うパンテミットルは、今や民衆の願望を代表する英雄的な存在となっていたからだ。その上、フナク・ケエルがイツァ人の直系のココム家¹⁷の軍隊によって包囲されている、という情報を総督は抜け目なくキャッチしていた。この連中は、いま向かうところ敵なしの快進撃を続けていたので、フナク・ケエル自体、もはや恐れるに足らずと踏んでいたのである。

総督の目論見はこうだった。喧嘩の裁きは神々の判断に委ねよう。新しい競技場が完成したその日、柿落^{こけら}としとなる、その第1試合はこの二人の間でトラチトリのゲームを競わせるのだ。神殿に祀られた神々が勝者を決めることだろう。その託宣は、神聖かつ公正なものに違いない。それに付随してさらに次のようなことが定められた。勝者には、翡翠細工師の娘を賞品として要求する権利を与える。これに反して敗者の方は、神々の犠牲として捧げられる。その心臓は抉り出されて神像の前に供えられるのだと。メキシコではよく知られたこの風習は、ユカタン半島ではまだ比較的珍しいものだった。いやこれは、と総督は考えた。新来の神々に犠牲を捧げ慰撫できる、またとない機会が到来したぞ。

二人の若者にもまた異存はなかった。民族の象徴である神々と、愛する少女を賭けて、力を競い合うことに彼らは進んで同意した。当のニクテの意志は、彼女は実際には奴隷であったので何ら問題にもならなかった。しかしながら、彼女自身の気持ちは、実は外国人であるパンテミットルよりは、同じイツァ族出身の王子の方¹⁸にずっと傾いていたのであるが。

夜が明けて競技場の柿落としの日となった。この日の第1試合のただならぬ背景を察知して、民衆の間には既に様々な噂が飛び交っていた。近隣の街や村、さらには何リーグ¹⁸も離れたイツァマルからも観客がどっとばかりに押し寄せた。通常はマントや金、および翡翠細工などを賭けたものだが、時には人間そのものが、賭けの対象となり、負ければ相手の奴隷になったのである。しかし今日、敗者はその命を賭けて戦うのだ。巨大な壁には群集がぶら下がって鈴生りのようになっていたが、総督とその部下は、二匹の虎の神殿の柱廊に陣取って、他の高位貴顕も両側の小神殿一杯に並んでいた。犠牲は、これら大小三つの神殿の神々全員に捧げられるのだ。華やかな衣装で身を飾った若者たちが競技場の中で歌舞音曲を演じていた。豪華な法衣を身に纏った神官たちの行列が厳かに入場して来た。祈りが捧げられると、ボールが四度、競

17 ココム家 the Cocomes. イツァ族直系の一派。フナク・ケエルの子孫に当たるが、やがて彼を追放して、マヤパンの支配者となった。しかしマヤパン城内に人質として幽閉されたマヤの貴族らが、メキシコ出身のシウと手を組んで蜂起したため降伏し、旅に出ていて不在の息子一人を除いて一族は惨殺された。こうして栄光の都マヤパンもまた、1442頃、破壊されて永遠に放棄されたのであった（ル・クレジオ254）。本注9）参照。

18 何リーグ many leagues. 1リーグは3マイル。約4、8キロメートル。

技場周囲の東西南北、四つの方位に向かって投げられた。

二人の若者は、それぞれ五人の友人をチームメイトに従え入場して来た。突然、場内は水を打ったように静かになったが、遅しい若者の裸体を見るや、観客たちは一斉に賛嘆の呟きを洩らした。彩色を施した彼らの体は輝いた。彼らが身に着けた腰帯は金と翡翠で飾られていたからだ。パンテミットルの方が賭けでは人気があった。彼はチチェンをユカタン半島第一の都市に復興させた功労者であったから。タシュカルとその同僚が、重いゴム・ボールを蹴ると、球は大きく弾んで敵陣の方に転がった。

ボールは一瞬、穴¹⁹の辺りをためらうように何度か回ったあと、後戻りし、これを受けんと空中高くジャンプしたパンテミットルの尻に直接当たったのだ。彼とその仲間はメキシコでは、よくこのゲームをやっていたので、その効果はてきめん現れた。パンテミットルが仲間にパスしたボールが次々と回されていった。敵側のすぐそばで最後にこのボールを受けた彼が、狙い定めてボールを蹴ると、それは鮮やかに穴の中に収まって、勝負はあっさりと決まったのだ。

試合のルールに従って観客のマントは勝者に与えられることになっていた。しかしこの場合、壁から飛び降りてフィールドの中に殺到するものは誰一人いなかった。全員が来るべき悲劇の幕切れを予想して固唾を飲んで見守った。なぜなら、疲れ切ったタシュカルが、パンテミットルの足下に崩れると、パンテミットルは抱きかかえて虎の神殿へと運んだのだ。ここで総督が二人を迎えたのである。タシュカルの父親はもはや恐れるに足らない。ココム家によって帝都から追い出されたという、情報が既に届いていたから。フナク・ケエルの息子を人身御供にするなら、マヤパンの新しい征服者の機嫌を取ることができると、この総督は考えたのである。

それゆえ、総督はことを急いだ。この競技場から石を投げれば届く、と思われるほどの距離にある、有名なピラミッド寺院の柱廊で行われる、その儀式の準備のために、神官たちが呼び出された。生贄を供える石が用意された。しかもタシュカルは神々の要求するような、一点の瑕瑾もない若者である。何の抗いも見せず、犠牲用の素晴らしい死装束に袖を通した。コーバル（天然樹脂）を燃やす香炉から立ち昇る、馥郁たる芳香に彼の全身は浸され、着ている人を埋め尽くすほどの夥しい献花にその身は包まれていた。うねうねと登る階^{きざはし}を神官たちの行列に囲まれて登って行くタシュカルの、そのすぐ後から数人の小姓が続いていった。メキシコの習慣によれば、神を体現すると信じられた、この犠牲の若者は最大級の名誉と尊敬を受けて大事に取り扱われたのだ。

最上段に達すると、花とマントを放り投げた彼は、六人の神官に迎えられた。彼らの髪の毛

19 穴 the hole. 本文では穴という表現だが、'a stone ring or hoop' (石の環) としている書(Wickersham37)もある。「平行する二つの構造物に挟まれた細長い...大文字のIの形」をした競技場の「コート沿い、またはエンドゾーンに設置された輪ないし標識」がゴールとなった (メアリ・ミラー／カール・タウベ106)。本注16)も参照。

毛は、前の犠牲者の返り血を浴びてベッタリとくっついており、また苦行の一つとして切り落とされた耳は、ダラリと両側の頬のあたりに垂れ下がっていた。犠牲の石を示されて、**タシュカル**は、その上に仰向けになった。五人がかりで神官が両腕と足を押さえると、緋色のマントを羽織った六番目の僧侶が、その柄に二匹の蛇の絡み合った絵が彫り込まれた、生贄の儀式の折りに用いる、かの有名なナイフ²⁰で、巧みに若者の胸を切り開いた。手を切り口に差しこむや、まだ脈動を続けている、生温かい心臓をぐいと掴み出した。まず落日に向かってこれを掲げ、さらにこの神殿の本尊である神像の足下にドサッとそれを投げつけた²¹。

さて、**パンテミットル**が、翡翠職人の家に向かう途中、遠くから何事か唱うような、また嘆き悲しむような人の声が聞こえてきた。その家の前に来て大勢の人が集まっているのを見て驚いたが、まもなく、愛する**ニクテ**もまた、犠牲としてその命を差し出そうとしていると聞かされて若者は恐れ戦いた。彼女もまた、神々への犠牲としてイツァ族の聖なる泉に身を投げ出す決意の程を示したのであった。

神官らは、既にその準備に向けて怠りなかった。六十日の断食期間に入った。様々な捧げものと香料が運ばれ、寝台に横になった**ニクテ**は、純白の死衣と花環で身を飾っていた。絶望と深い悔恨の気持ちから、**パンテミットル**は、フレスコ画のある部屋の扉に、ライバルの最期のシーンを一心不乱に描いていた。また神殿の後方部に当たる、ある一室にも、羽のついた蛇の神を拝跪している戦士と市民の姿を彫り込んでいた。こうした行為によって神々から好意を受け、惨めな気持ちから解放されることを望んだのである。

生贄の泉²²、すなわち巨大な自然そのままの井戸は、**タシュカル**が死んだ神殿からほんの少

20 生贄の儀式の折に用いる、かの有名なナイフ the famous sacrificial knife.「燧石の短刀は神官がいけにえの人間の胸を切り裂いて心臓を取り出すときに用いられた」(ル・クレジオ171)。なお、このナイフは「黒っぽいガラス質の火山岩で、鋭い刃先と鏡のようになめらかな光沢ゆえに非常に尊ばれた」(メアリ・ミラー／カウル・タウベ130) 黒曜石であったかもしれない。

21 「1519年メキシコに到着したコルテスとその部下たちは...メキシコで目撃するものにたいしてまったく心の準備ができていたわけではなかった。...コルテスと彼に同行した征服者ベルナルド・ディアスが目撃者として証言したように...アステカの神々は人間を食べたのである。人間の心臓を食らい人間の血を飲んだのである。...アステカ族の供犠儀礼について、従来の記述は生贄の死体がピラミッドを転がり落ちることをもって終わっている。われわれは、まだ脈打っている心臓が神官の両手により高く掲げられているという情景のイメージに眩惑されて、階段の下に転がった死体がどうなったかを問うのをつい忘れてしまう...死体がどうなったかは実ははっきりしている。...すなわち、生贄は食べられたのだ」(マーヴィン・ハリス154-176)。以上はアステカ族の「戦争・供犠・食人の複合」的習慣についての記述であって、その前時代のマヤ文化の実態は果たしてどのようであったかは知る由もない。しかしハリスはこのような風習は「アメリカ先住民の固有の特質であった」わけではないと断った上で、その「人肉食食」の真の理由をメソアメリカにおける「たえざる人口の増加と生産強化」に求め、その結果「動物資源の枯渇」を招いて「一般の人々の食事に動物の肉はなくなってしまった」ことが「蛋白質と脂肪の補給」を目的とする「食人」の習俗に結びついたのであろう (マーヴィン172-174)、と生態人類学的な面からその原因を憶測している。

22 生贄の泉 the Cenote of Sacrifice. ユカタコ・マヤ語の「ゾノト」 dzonot から転化した「セノーテ」という名で呼ばれる天然井戸[石灰岩地方の陥没穴に地下水がたまったもの]は、川も湖もないユカタン低地北部では主要な水源であった。多くのセノーテはまず第一に真水の供給源であったが、中には、巡礼の地、供物を捧げる場として機能したものもあった。その最も有名な例がチチェン・イツァの聖なるセノーテである。1840年代にそのうちのひとつバランカンチューを、ジョン・ロイド・スティューヴンスとフレデリック・キャサウツドが訪れて崇拜儀礼の様子を記録している。崇拜の対象になった多くのセノーテは、マヤの雨の神チャックに捧げられていた (メアリ・ミラー／カウル・タウベ195)。

し離れたところにあった。この天然の泉水、洞穴からの湧き水に、神々への捧げものとして人々は最も貴重な財産を投げ込んできた。清らかな乙女を特に神々は所望していると言われ、その暗い20フィートの深さの水は、多くの犠牲者を呑み込んだのであった。

明けて六十日目朝のこと。とある行列が翡翠細工師の家を出た。護符を上に乗せた大皿に数え切れないほどの量のコーバルが焚かれた。僧侶たちが、いま手にしている木製の儀杖——その柄の部分は石製のモザイクだったり、黄金の仮面がかぶせてあったりしている——はやがて暗い水の中に、そのすべてが投げ込まれるのだろう²³。当の娘は見事な手編みの織物を身に纏い、それを夥しい金の鈴と翡翠のビーズで飾り立てていた。その両腕に嵌め込まれたブレスレットには、犠牲となった若者の姿が描かれていた。ニクテはタシュカルへの愛のために死ぬのだが、しかし他の人たちにとってそれは、神々への最高の献身に他ならなかったのだ。

行列は、うねうねと続く道を進んで行き、やがて巨大なピラミッドにまで来た。そこから両側にたくさんの像が並ぶ広い道を迎れば、犠牲の泉のところに出て来るのだ。大勢の参拝者の群れが聖なる泉を取り囲んでいた。乙女を先導する神官の集団は、泉のすぐ緑の小さな神殿の中に入った。さらに多くの香が焚かれ、泉水の神々を讃える祈りや歌がきこえるさ中、高価な捧げ物が次々と水の中に投げ込まれた。やがて、周囲がシンと鎮まり返り、儀式の主役は、いま神殿の屋根の上に。一呼吸して乙女は深い水の中へと身を踊らせる。大きな水煙が上がった。水面を伝わる漣が、その縁まで広がったそのときに、貴い貢ぎ物を受け取って喜ぶ神々になり代わって、一斉に上がった祈りの声が、低く高く流れて行く。

過労と悲嘆に身をすり減らしたパンテミットルは、もはや苦悩に堪え切れず、病の床に臥して、やがてこと切れてしまったのである。しかしその死の直前に彼は、タシュカルの母であり、かつまた女王でもあった、あの哀れなティビルの灰を納めるための、ピラミッド神殿の小さな模型を完成していた。死んだらきっと父祖伝来のこの地に埋めてくれるようにと頼まれていたのだ。

パンテミットルの死を悼み、人々は喪に服していた。その偉大な業績によって、彼はこの帝国の英雄だった。その傑作、ピラミッド墳墓は完成した。また人々は地下の納骨堂のある、この美しい神殿をぜひ建築家の墓にするようにと言い張ったのだ。亡骸を上に乗せた火葬の薪は、

23 「最も有名な生贄のセノーテはユカタン半島北部の後期マヤの中心地チチェン・イツァの近くにある。このセノーテの底をさらったところ人骨や黄金製工芸品が大量に出てきたが、これらは水の神を鎮めるために人間や祭祀用具が井戸の中に投げ込まれたことを示している」(マーヴィン・ハリス143)。さらに「チチェン・イツァの聖なるセノーテは、征服以前のユカタンで最も重要な巡礼地であった。クレメンシー・コギンスが示唆したように、広大な円形の水の表面は予言とト占に関係した巨大な鏡とみなされていたようである。何世代にもわたり、翡翠や黄金の板や生贄の人間といった供物が水中に投じられた。特に処女を選んでセノーテに捧げたという証拠はないが、チチェンのセノーテの底から発見された人骨の大部分が、思春期前の少年少女のものであるのは事実である。民族史学の説によれば、セノーテに落とされた者の一部は浮き上がり、水面下で得た託宣をたずさえて生還したという」(メアリ・ミラー/カール・タウベ 195)。

各方面からの供え物によってすっかり覆い尽くされていた。自分が死んだらその灰は、ぜひ、**タシュカル**の遺灰に混ぜ合わせて欲しい、それが彼の遺志だった。こうしていま、最後の儀式が始まろうとしている。やがて、この帝国でも最も貴重な財産の一つとなる、美しい雪花石膏アラバスターの壺——それは、遠い国から弔問に訪れた、さる君主の贈った物だった——が、神官たちに運ばれていま、ピラミッド型墳墓の最上段にまでやって来た。**パンテミットル**と**タシュカル**の遺灰はその中に納められている。翡翠の装飾品に包まれた、その花瓶はしずしずと神殿の床から、びっしりと石を敷き詰めた坑道の中を降りて塚の下、自然のままの地下納骨堂の永遠の闇の中に安置されるのである。

アルフレッド・M・トッザー²⁴

参考文献：

1. 和文のもの

- 大井邦明「チチェン・イツァ」『世界大百科事典』平凡社、1988年
クレジオ、J・M・ル（原訳・序）/望月芳郎（訳）『マヤ神話——チラム・バラムの予言——』新潮社、1991年
グロフ、スタニスラス著/川村邦光訳『死者の書—生死の手引』イメージの博物誌32、平凡社、1995年
小池佑二「トルテカ族」『文化人類学事典』石川栄吉他編集、弘文堂、昭和62年
ハリス、マーヴィン（著）『ヒトはなぜヒトを食べたか』鈴木洋一訳、ハヤカワ・ノンフィクション文庫、1997年
ミラー、メアリ/タウベ、カール『マヤ・アステカ神話宗教事典』増田義郎監修・武井摩利訳、東洋書林、2000年
吉村作治「ピラミッドの王国」『略奪された文明—謎のマヤ・アステカ・インカの栄光と悲劇』Newtonアーキオ、ビジュアル考古学 Vol. 8, Newton Press, 1999年

2. 英文のもの

- Wickersham, John M.(ed.). *Myths and Legends of the World*, Vol.3, Macmillan Reference USA/ An Imprint of The Gale Group, New York, 2000

付記：本訳稿はエルシー・クルーズ・パーソンズ編著/神徳昭甫訳「北米インディアンの生活（7）——23部族の伝承と習慣」『富山大学人文学部紀要』（第42号、2005年3月）の続編である。

なお本稿は、拙著『日米文学の中の「生」と「死」——アニミズムの復権』（近代文芸社、1998年）の第二部：〔翻訳〕アメリカ先住民の生活と宗教の第七章「トルテカ族の建築技師—チチェン・イツァ帝国の興亡」を元にしており、その一部を修正・加筆したものであることを断っておきたい。

24 アルフレッド・M・トッザー Alfred M. Tozzer. 生没年不詳。アメリカの人類学者で、原著の分担執筆者。著書に『アステカ帝国』（*The Domain of the Aztecs*, Holmes Anniversary Volume, 1916）がある。